

タイトル：「宣教に伴う言語学(第二期)」(平成 22 年度第 1 回研究会)

日時：平成 22 年 10 月 3 日 (日曜日) 午前 9 時より午後 5 時

場所：本郷サテライト 7 階会議室

出席者：石川博樹(AA 研)、岡美穂子(東京大学史料編纂所)、折井善果(日本大学商学部)、川口敦子(三重大学人文学部)、岸本恵実(京都府立大学文学部)、白井純(信州大学人文学部)、豊島正之(AA 研)

1.折井善果(AA 研共同研究員・日本大学)

『ひですの経』の対訳分析をめぐる若干の考察

翻訳底本の候補として 1583 年サラマンカ刊スペイン語版と 1586 年ベネチア刊ラテン語版(又はその再版である 1602 年ケルン刊本)のいずれが妥当かを論じた他、聖書の引用態度、原文翻案の事例を論じたもの。

2.川口敦子(AA 研共同研究員・三重大学)

キリシタン資料のゲズをめぐるバレット写本エワンゼリヨに現れるゲズ(カラタチの意)の語の当時に於ける方言性を論じたもの。

3.岸本恵実(AA 研共同研究員・京都府立大学)

キリシタン資料における「南蛮」「天竺」のゆれと変化--『羅葡日辞書』『日葡辞書を』中心に--

キリシタン文献が、インドの表現として、「天竺」を避けて「南蛮」を敢えて用いてキリシタン文献特有の意味限定を作り出している可能性を指摘したもの。

4.白井純(AA 研共同研究員・信州大学)

キリシタン版後期活字の材質について

「ひですの経」などの用例数 1 の活字が木活字である事を推定し、更に「ぎやどべかどる」等の用例数 1 活字にも木活字の可能性が波及する事を論じたもの。

白井純発表を受けて、「ひですの経」の原本再調査の打ち合わせを行った。

(文責・豊島正之)